



高山右近 篇3

キリシタン大名

永禄3年(1560)に澤城へと入った高山友照ともてる・右近らは、大和(宇陀)から摂津へと戻り、永禄12年(1569)、友照は城主の和田惟政これまにかわって芥川城(高槻)を預かりました。

天正元年(1573)、高山友照・右近は高槻城へと移り、高槻城の改修や城下町の整備を行いました。城下町には教会(天主堂)なども建設しました。右近は、織田信長や豊臣秀吉のもとで、キリシタン大名として活躍し、天正13年(1585)には、播磨(明石)へと移りました。

天正15年(1587)、キリスト教に対する政策を大きく換えた秀吉から信仰を捨てるように命令(伴天連追放令)されましたが、信仰を捨てなかったために改易かいぎとなり、大名の地位を失いました。その後、前田利家の保護を受けて、加賀(金沢)へと身を寄せました。ここでは、金沢城下町の整備、高岡城の整備などを行いました。

慶長19年(1614)には、「キリシタン禁教令」により、右近の国外追放が決定され、フィリピンのマニラへと流されました。

大名という地位を捨てて、揺るぎない信仰を貫いた右近には、平成28年にカトリック教会から「福者ふくしゃ」という称号が与えられています。

また、右近ゆかりの各地には、右近像が建てられています。澤城の麓、榛原沢には、「高山右近受洗の地」と刻まれた顕彰碑や「少年右近像」が建てられています。右近のキリシタン大名としての原点は、ここ、宇陀にあります。

